

令和3年度病害虫発生予報 第9号（令和4年4月予報）

今月の発生に注意を要する病害虫

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
カキ	炭疽病	やや早い	やや多い
	フジコナカイガラムシ	やや早い	平年並
ウメ	黒星病	やや早い	平年並
	かいよう病	やや早い	平年並
ナシ	黒斑病	やや早い	平年並
	黒星病	やや早い	平年並
果樹共通	果樹カメムシ類	早い	多い
イチゴ	うどんこ病	平年並	やや多い
	ハダニ類	平年並	やや多い
ハウレンソウ	べと病	平年並	やや多い
	アブラムシ類	平年並	やや多い

○気象予報（近畿地方の1ヶ月予報：3/26～4/25）

気温：平年より高い確率が50% 降水量：平年並の確率が40%
日照時間：平年並の確率が40%

○今月の農業適正使用のポイント

1. ハウス等で水稻や野菜を育苗するとき

後作への農薬残留を防止するために、次の点を徹底してください。

- ①薬剤処理時やかん水時に育苗箱や育苗ポット（鉢）等から漏れ出た農薬が土壤に浸透しないよう、処理前にハウス全面にビニルシートを敷くなどして土壤と隔離します。
- ②薬剤の処理時には、薬剤が地面に飛散しないよう丁寧に処理します。

2. 水稻の育苗箱施用

水稻の育苗箱施用を行う場合は、十分な薬効を確保するため、以下の点に注意します。

- ①ラベルに書かれた規定の処理量を遵守します。
- ②移植直前に処理する場合は、処理後に軽く散水し、稲体に有効成分を吸収させてから移植します。
- ③移植後はかけ流しを控え、1週間程度止水します。

3. 農薬の適用作物名

農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。以下のような作物間ではいずれも農薬登録内容が異なりますので、特に注意して下さい。

○トマトとミニトマト

○ピーマンとシシトウ

○実えんどう（未成熟な種子を収穫するもの）とさやえんどう（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）とえんどうまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○さやいんげん（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）といんげんまめ（成熟した種子を収穫するもの）

その他、判断に迷った場合には、病害虫防除所や各農林振興事務所へお尋ねください。

※農薬に関する情報は、令和4年3月28日現在の登録内容に基づいて記載しています。

I. 普通作物

1. 水稻（大和高原地域）

（1）苗立枯病類（苗立枯細菌病、苗腐敗症、褐条病等の細菌病及びピシウム菌、フザリウム菌、リゾープス菌、トリコデルマ菌等の糸状菌病）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4月は気温の変化が大きく、特に施設内では顕著であり、苗立枯病類の発生しやすい気象条件となります。

防除上の注意事項

- 1) 種子は、採種ほ又は穂枯性病害の発生が認められなかったほ場から採種したものを使用します。刈り遅れ又は倒伏ほ場の種子や外観の汚い種子は使用しません。
- 2) 種子伝染性病害防除のため、塩水選は必ず行います。塩水選を行わず薬剤による種子消毒を行うと、防除効果が十分得られない場合があります。
- 3) 種子消毒には、苗腐敗症（もみ枯細菌病）又は苗立枯細菌病等にも適用のある薬剤を使用します。処理に際しては、薬液がむらなく付着するように種籾は袋の半量程度とし、薬液浸漬時には、種子袋をしっかり振って籾についた空気を十分に追い出します。
- 4) 種子消毒中の薬液は必ず10℃以上に保ち、浸漬中は時々かく拌します。
- 5) 使用済みの薬液は、河川や池などに流れ込まないように十分注意し、適切に処理します。
- 6) 浸種は10～15℃の十分な水に4日間程度、催芽は約30℃で1日程度行います。
- 7) 育苗用土は排水のよいものを使用し、播種量は湿もみで120gとし、厚まきは避けます。細菌による苗立枯病の常発地域では、播種時の散布剤または培土処理剤を併用します。
- 8) 育苗期間中の温度と水管理には十分注意し、30℃以上の高温や4℃以下の低温を避け、培土の過乾・過湿に注意します。
- 9) ビニルハウス内での育苗や被覆資材を用いたトンネル育苗では、被覆したまま放置せず、高温時には必ず換気を行います。

注) 種子消毒（温湯消毒を含む）により病原菌を完全に殺菌することは出来ません。育苗管理次第で病原菌はすぐに増殖しますので、塩水選および種子消毒・薬剤防除を併用することにより病原菌の密度をしっかりと下げ、病原菌を増やさないための適切な管理（培土の選択・播種量・温度管理・水管理等）を行います。また、薬剤による防除は、発生後では効果が劣るため、発生前の予防が大切です。

（2）いもち病（苗いもち）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 育苗期後半の高温による蒸れで、苗いもちの発生が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) 採種ほ、または穂いもちの発生がなかったほ場から採種した健全種子を使用します。
- 2) 苗立枯病類の防除上の注意事項を参考にして、塩水選と種子消毒を確実に行います。
- 3) 育苗用土には排水のよい培土を使用し、厚まきは避けます。
- 4) 育苗中に苗いもちの発生を認めたら、直ちに防除を行います。田植え前に箱施用剤を処理する場合でも、必ず田植え前までに散布剤による防除を行います。

（3）ばか苗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 昨年の本田巡回調査では、平年並の発生でした。
- 2) 種子伝染により被害が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) ばか苗病の発生ほ場やその周辺ほ場で自家採取した種子の使用は控えます。
- 2) 苗立枯病類の防除上の注意事項を参考にして、塩水選と種子消毒を確実に行います。
- 3) 育苗中の発病苗は抜き取り、本田に持ち込まないようにします。

Ⅱ. 果 樹・チ ヤ

1. カ キ

(1) 炭疽病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 昨年 10 月下旬の発病果率は 7.0%でした。
- 2) 3 月下旬の巡回調査では、越冬病斑の見られる罹病枝率が甘柿園で 2.4%とやや多くなりました。
- 3) 4 月の気温が平年より高いと予想されており、発生時期がやや早くなると見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 4 月下旬頃から新梢への感染が始まります。初期発生を抑えることが重要ですので、ジマンダイセン水和剤またはオーソサイド水和剤 80（ウメ隣接園）を丁寧に散布します。

(2) フジコナカイガラムシ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 昨年 10 月下旬の被害果率は 7.8%でした。
- 2) 4 月の気温が平年より高いと予想されており、発生時期がやや早くなると見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 展葉初期（4 月中旬頃）に越冬幼虫は粗皮下から新梢に移動します。このタイミングでの防除は春以降の密度低下に効果的ですので、トクチオン水和剤またはモスピラン顆粒水溶剤（ウメ隣接園）で防除します。

2. ウ メ

(1) 黒星病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 3 月下旬の巡回調査の結果、越冬病斑の見られる罹病枝率は 4.0%でした。
- 2) 4 月の気温が平年より高いと予想されており、発生時期がやや早くなると見込まれます。

防除上の注意

- 1) 4 月上旬頃から枝の越冬病斑上に分生子が形成され、雨水によって伝搬し感染しますので、落花後～展葉初期の防除を徹底します。
- 2) 黒星病は雨の多少により発生量が大きく異なります。4～5 月が多雨の場合は、追加防除を行います。

(2) かいよう病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 3 月下旬の巡回調査の結果、罹病枝率は 1.1%でした。
- 2) 4 月の気温が平年より高いと予想されており、発生時期がやや早くなると見込まれます。
- 3) 枝で越冬した病原細菌は開花期頃から病斑を形成し、降雨とともに飛散して傷口、落葉痕などから侵入します。

防除上の注意事項

- 1) 前年発生園では、4月上旬～下旬に抗生物質剤（マイコシールド）を約10日おきに散布します。
- 2) 連年発生が見られる場合は、防風対策（防風ネット・防風垣）が必要です。

3. ナシ

(1) 黒斑病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 昨年秋期の発生量は平年並でした。
- 2) 4月の気温が平年より高いと予想されており、発生時期がやや早くなると見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 病芽（発芽してこない芽）を除去し、菌密度を低くするようにします。また、開花期前後は重点防除期ですので防除を徹底します。

(2) 黒星病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 昨年秋期の発生量は平年並でした。
- 2) 4月の気温が平年より高いと予想されており、発生時期がやや早くなると見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 開花期～落花期にかけて降雨日が多いと、感染、発病が助長されます。
- 2) 初発は、花そう基部に病斑が認められます。このような病斑は除去するとともに、開花期前後の防除を徹底します。

4. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類

予報内容 発生時期：早い 発生量：多い

予報の根拠

- 1) 県内18カ所におけるチャバネアオカメムシの越冬密度調査の結果、全地点で越冬成虫が確認され、越冬個体の密度は平均16.3頭と多くなっています。

防除上の注意事項

- 1) 前期発生(5月～8月前半)は多くなることが予測されます。今後の予察情報に注意し、十分な警戒が必要です。
- 2) ウメ、モモが早期から被害を受けやすく、カキでは着蕾～開花期、ナシでも幼果期から飛来が始まります。例年以上に園地をよく見回り、虫や被害を確認した場合は直ちに防除します。ただし、カメムシがいない時の予防散布は必要ありません。

5. チャ

(1) カンザワハダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 3月下旬の茶園における越冬密度は平年並でした。

防除上の注意事項

- 1) 茶園をよく観察し、初期防除を徹底します。
- 2) 被覆を行う場合、被覆前に丁寧に防除します。
- 3) 薬剤を選定する際に摘採前使用日数に注意します。特に収穫時期が早い茶園では、注意が必要です。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. イチゴ

(1) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率30%、平均発病果率0.5%でした。
- 2) 今後気温の上昇とともに果実だけでなく葉への感染が進展します。

防除上の注意事項

- 1) 発病果は伝染源となるので、見つけ次第除去します。
- 2) 発生が広がると防除が困難になるので、発生初期に1週間間隔で複数回の防除を徹底します。
- 3) 薬剤防除では、薬液が葉裏に十分付着するよう、畝の両側の下から噴き上げるように散布します。
- 4) 薬剤耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を控えます。また、薬剤散布後には必ず薬剤の防除効果を確認し、効果の低い薬剤の使用は中止します。

(2) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率70%、平均寄生株率12%でした。
- 2) 春の気温上昇と共に増加し始めています。

防除上の注意事項

- 1) 天敵製剤を導入しているほ場でも、薬剤による追加防除が必要になる可能性があります。葉裏のハダニ類とカブリダニ類の発生をよく観察します。
- 2) ナミハダニ黄緑型は多くの殺ダニ剤に対する感受性が低下しています。マイトコーネフロアブルとダニオーテフロアブルは、効果のある個体群が多いです。殺ダニ剤の効果に疑問がある場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所へご相談下さい。
- 3) ハダニは葉裏に生息しているので、薬液は必ず葉裏に散布します。また、イチゴでは葉が込み合い、葉裏への薬液の均一な付着が難しくなっていますので、古葉の整理後に散布します。
- 4) イチゴの後作にナス、トマトなどを栽培する場合は、次作に残らないように残さ処理を徹底します。

(3) アザミウマ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率10%でした。
- 2) 施設内でのアザミウマ類の越冬密度は低いですが、4月下旬からハウス外からの飛び込みが始まると見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 白い紙の上で花房を叩き、アザミウマの落下の有無を確認します。花あたり 0.1 頭を超える発生を認めた場合にはスピノエース顆粒水和剤などを散布します。ただし、ハダニ防除のためにカブリダニ製剤を導入しているほ場では、ファインセーブフロアブルかベネビアODを散布します。
- 2) イチゴでの発生ほ場の後作にトマトを栽培する場合は、イチゴ収穫終了後に直ちにハウスを閉め切り、蒸し込みます。また周辺雑草は開花前に除草します。

2. ホウレンソウ

(1) べと病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：やや多い**

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は40%、発生株率は12%でした。
- 2) 春先に天候不順が続くと、発生を助長する恐れがあります。
- 3) 県内ではレース1～10までの抵抗性品種で発病する新レースが確認されています。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は伝染源となるので、見つけ次第、除去します。収穫残さはハウス周辺には放置せず、埋没又は袋詰め等で処分します。
- 2) 平均気温8～18℃で、曇雨天が続いたり、ハウスを閉め切るなど、多湿条件が続くと多発するので、温度、かん水、通風など栽培管理に注意します。
- 3) べと病の発生が懸念される場合には、は種前にユニフォーム粒剤の全面土壌混和处理や生育初期にランマンフロアブル等の散布剤による予防を行います。

(2) ホウレンソウケナガコナダニ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：やや少ない**

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率20%、平均被害株率0.4%でした。

防除上の注意事項

- 1) 秋～冬に発生していたほ場でこれから作付けする場合は多発が見込まれますので、防除薬剤の処理を励行します。
- 2) 発生が予想されるほ場では、休作期のバスアミド微粒剤の土壌混和处理が効果的です。播種後は2葉期でのカスケード乳剤の散布、4～6葉期でのアフーム乳剤の散布の体系防除を行います。
- 3) 被害株や収穫後の残さはハウス内にすき込まず、ほ場外に持ち出して処分します。
- 4) 稲わらやもみ殻などの未熟有機物を投入すると発生を助長します。土作り資材を投入する場合は完熟堆肥を使用します。
- 5) は種から収穫までの生育日数が短い品種では、長い品種に比べて収穫期の被害を低減することができます。

3. ネギ

(1) べと病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 発生に好適な時期となりますので、注意して下さい。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は伝染源となるので、見つけ次第、除去処分するとともに、発病残さはほ場周辺には放置せず、袋詰めして処分します。
- 2) 前年にべと病が発生していたほ場では、ジマンダイセン水和剤による予防に努めます。

- 3) 多湿条件が続くと発生しますので、ほ場の排水に注意します。また、降雨前に予防散布を行います。

(2) ネギハモグリバエ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査ではまだ発生を認めていませんが、4月中旬頃から食害痕が発生すると予想されます。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期株元灌注処理の効果が比較的高いので、発生初期に処理します。処理薬量が少ないと効果が低いので、ラベルに書かれた濃度、薬量をよく確認して処理します。また定植ネギの場合は、育苗期後半～定植当日に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) 散布剤を使用する場合は、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくびかななどの展着剤を加用します。
- 3) 前年度秋に多発したほ場の株元土中にはハモグリバエの蛹が高密度で残存するため、作付け前にバスアミド微粒剤などを処理します。

(3) ネギアザミウマ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、平均被害株率3%でした。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期株元灌注処理でネギハモグリバエと同時に防除します。また定植ネギの場合も同様に、育苗期後半～定植当日に育苗トレイにも灌注処理を行います。
- 2) 散布剤を使用する場合は、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくびかななどの展着剤を加用します。
- 3) ピレスロイド系やネオニコチノイド系殺虫剤への感受性が低下した個体群が認められています。防除効果に疑いがある場合は、各農林振興事務所か病害虫防除所にご相談ください。

4. キク

(1) 白さび病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率25%、発生株率0.5%でした。
- 2) 今後気温の上昇と降雨が続くと、下葉病斑上に形成された胞子が飛散します。

防除上の注意事項

- 1) 下葉で発病した越冬病斑は伝染源となりますので、直ちに取り除いて埋没又は袋詰め等して処分します。
- 2) 初発後は、オペラフラワー乳剤、ラリー乳剤、カナメフロアブル、ハチハチ乳剤等の薬剤で防除します。
- 3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避けます。

(2) ナミハダニ黄緑型

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 多くの殺ダニ剤に対して感受性の低下した個体群が発生しているため、同一系統の殺ダニ剤の連用を避けるようにします。効果に疑問がある場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

5. トマト

(1) 葉かび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、発生は認められません。
- 2) 県広域で Cf-9 抵抗性品種に感染できるレースの発生が認められています。

防除上の注意事項

- 1) Cf-9 抵抗性品種を栽培しているほ場においても、本病の発生に注意してください。
- 2) 多湿条件下で発生しやすいので、株の密植を避け、換気を行うなど湿度を下げるように管理します。
- 3) 葉裏の病斑上に胞子が形成されると急速に拡大し防除が困難になるため、発病前にダコニール 1000 やバルクートフロアブルで予防散布に努めます。薬剤が葉の裏面にも十分にかかるように丁寧な散布を心がけます。
- 4) 一部地域では QoI 剤、SDHI 剤の耐性菌が確認されています。同一系統薬剤の連用を避けるとともに、薬剤の効果に疑問を感じた場合は各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

6. 野菜類・花き類共通

(1) 灰色かび病（イチゴ・トマト）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、イチゴでは発生ほ場率 20%、平均発病果率 0.4%、トマトでは発生ほ場率 50%、発生株率は 0.5% でした。
- 2) イチゴの後作にトマトを栽培する場合は、イチゴ残さ上で菌密度が高まりますので、初期の多発生に注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) ほ場排水とハウス内の換気に努め、湿度低下を図ります。
- 2) 発病果は伝染源となるので、早期除去に努めハウス外へ持ち出し、処分します。
- 3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避けます。
- 4) QoI 剤、SDHI 剤、MBC 剤の耐性菌が確認されています。耐性菌の発生が少ないロブラール水和剤、セイビアーフロアブル 20、フルピカフロアブル等を使用します。

(2) アブラムシ類（イチゴ・ハウレンソウ・キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：イチゴ・キク：平年並
ハウレンソウ：多い

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率と平均寄生葉率はそれぞれ、イチゴでは 40% と 6%、ハウレンソウでは 80% と 28% でした。キクでは発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) ハウレンソウでの発生が多いので、葉裏をよく観察して防除を励行します。
- 2) イチゴ親株はウイルス病の感染防止のために寒冷紗で被覆します。
- 3) 葉裏に薬剤がかかるよう、畝の両側の下から噴き上げるように丁寧に散布し、更に手首を返して頂芽部にも薬液が届くように散布します。

(3) アザミウマ類 (トマト・キク)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、トマト、キクでの発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 白い紙の上でトマト花房やキク新芽部を払い、アザミウマの落下の有無を確認します。
- 2) 施設栽培では、前作にアザミウマが発生していた場合は収穫終了後に直ちにハウスを閉め切って蒸し込み、後作に発生を持ち越さないようにします。
- 3) キクでは生育が進むと茎葉が混み合っで薬剤の付着量が低下しますので、初期防除に努めます。
- 4) ほ場周辺の雑草の花が発生源になりますので開花前に除草します。
- 5) 一部地域でミカンキイロアザミウマのスピノエース抵抗性系統を確認しています。同一系統薬剤の連用を避けるとともに、殺虫剤の効果に疑問を感じた場合は各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

(4) コナジラミ類 (イチゴ・トマト)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、イチゴでは発生ほ場率 20%、平均発生株率 10%でした。トマトでは発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) イチゴでは下葉に蛹が付いています。下葉のかき取りを徹底し、かき取った葉は施設から持ち出して処分します。
- 2) イチゴの土耕栽培で4月に栽培を終了する場合には防除は不要ですが、後作にトマトを植える場合は残さ処分を徹底して、後作に発生を持ち越さないようにします。
- 3) トマトでは、定植後は成長点付近をたたいて白い成虫の飛び出しが見られた場合はコルト顆粒水和剤などで直ちに防除を行います。幼虫や成虫のいる葉裏に薬液がかかるように丁寧に散布します。
- 4) トマトでは地域やほ場によって発生種が異なります。オンシツコナジラミとタバココナジラミ類で殺虫剤感受性が異なりますので、殺虫剤の効果に疑問を感じた場合は各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

お問い合わせは

奈良県病害虫防除所

TEL. 0744-47-4481

その他関連情報は以下をご覧ください

病害虫防除所ホームページ

<http://www.jppn.ne.jp/nara/>

奈良県農業情報システム (農作物病害虫・雑草防除指導指針)

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/nara>

上記の病害虫防除所ホームページに、以下のパンフレットを掲載しました。

○クビアカツヤカミキリ防除マニュアル 農業編

○トビイロウンカの防除技術